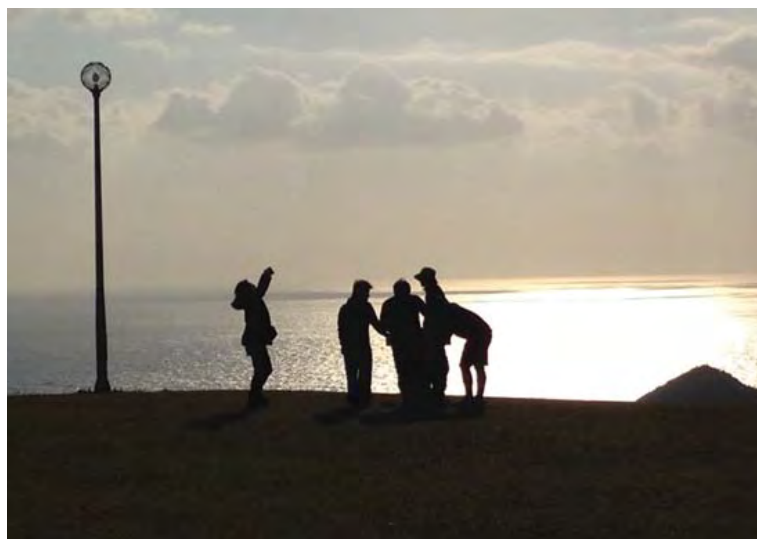


### 3. 金城 隆一 様 提出資料

# 子どもの居場所 kukulu



NPO法人沖縄青少年自立援助センターちゅらゆい  
代表理事 金城隆一



すべての子どもに居場所を

kukulu

ど  
こ  
に  
も  
居  
場  
所  
が  
な  
い  
子  
ど  
も  
が  
い  
る  
。

## kukulu

対象者・・・支援につながらない孤立状態の子どもの居場所。生活保護家庭や生活困窮世帯の子どもたちも格差なく居場所が利用できるよう無料で運営している。

### 那覇市委託事業時の実績

#### ○利用者数(平成25年度、26年度実績 延べ人数)

・31名(3年生18名、2年生9名、1年生4名)

・学校復帰した生徒・・・1名

・登校状況が改善した生徒・・・27名

#### ○3年生の状況(18名) \* 平成25年度、26年度実績

・高校への進学・・・16名 就職・・・1名 職業訓練・・・1名

○卒業後の状況 \* 働きながら休学中の子どもはダブルカウントとしている。

高校へ通学中・・・3名 就労・・・6名 不登校・・・4名

休学・・・5名 不明・・・2名

★16歳～18歳の就学支援・生活支援・就労支援が急務の課題ではないか？

# 子ども・若者の現状

中学生の全体数と不登校の割合 (H25年度)

	生徒数	不登校児数	割合
全体数	9,487	339	3.6%
保護世帯以外	9,174	278	3.0%
保護世帯	313	61	19.5%

沖縄県立高校の状況 (平成23年度)

	県立高校全体	全日課程	定時制課程	不登校者数	休学者
中退者数	930人	648人	246人	1382人	608人
中退率	2.0%	1.6%	11.7%	—	—

## Point

- ・中学時不登校では生活保護家庭の不登校率が高い。不登校率が高い理由については調査されていない。しかし**環境要因**が背景となり、子どもの**教育を受ける権利**が剥奪されている可能性が高い。
- ・そして不登校の子どもは学力が低い**ため定時制高校や通信制高校へと進学し高校中退する**。高校中退した段階で社会的に**困難を抱える子ども**の発見が難しくなる。

希望を感じられる世の中に  
ちゅらゆい

## そして...高校中退後の就職状況

高校中退者の就職率は**65%**



55,400人中36,010人が就職...中退後、**35%**の子ども、19,390人がニート化する  
(高校中退者数平成22年度)

36,010人の主な就職先

- ・飲食店
- ・水商売
- ・美容院の助手
- ・土木工事の肉体労働
- ワーキングプア率の高い職業である。
- 不安定就労 64%...23,050人
- 正社員採用 36%...12,960人

- ・子どもたちは不登校から定時制高校へ進学後、高校中退し労働条件の悪い環境で働くことになり、**負の連鎖**が繰り返される。
- ・子どもたちに必要な支援は多義に渡っている。**就学支援**や**生活支援**や**就労支援**や**金銭教育**等、総合的な支援が必要である。

希望を感じられる世の中に  
ちゅらゆい



## Kukuluとは…?

### 居場所のコンセプト

- ①自分の居場所…安心できる・他人から必要とされる
- ②将来について自己投資できる居場所
- ③社会へと送り出すための居場所…学校・進学・就職



Kukulu



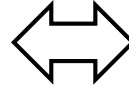
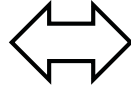
6つのプログラム  
 「食育プログラム」「コミュトレ」「個別面談」「学習支援」  
 「社会体験」「PC講座」  
 →その他子どもの実態に応じて必要な支援を実施する。

### 出口支援

- ①学校復帰
- ②進学支援
- ③中退予防
- ④就職支援
- ⑤生活支援

### 他機関との連携

- ①学校連携
- ②親支援
- ③制度活用
- ④無料塾
- ⑤その他必要な支援



地域・支援員等との連携

### Point

- \* 子どもの発見・誘導において地域や支援員との連携が重要。
- \* 子どもを取り巻く様々な課題に対して、関係機関が連携し支援する体制の構築が必要。



- ・家庭へのアウトリーチ
- ・送迎機能の充実

希望を感じられる世の中に  
 ちゅらゆい

## プログラム

### 食育プログラム

子どもへ食を提供し、「作る」「食べる」「楽しむ」の観点から、健康の大切さを学ぶ。調理を通して、コミュニケーションも行っている。将来の一人暮らしの際には生活支援としての効果も高い。



### コミュニケーショントレーニング

心因性、非行系の子どもの特徴として、自己肯定感が低く他者とのコミュニケーションに課題を抱える子どもが多い。そのため遊びを間に挟むことにより、コミュニケーションを円滑に行う練習を行う。

### 個別面談

各子どもの抱えている課題を面談で明確にし、将来への目標設定やモチベーションの向上を図り高校中退予防や学校復帰の計画を立てる。将来のキャリア形成についても相談しながら目標を設定する。



希望を感じられる世の中に  
 ちゅらゆい

## プログラム

### 学習支援

ほとんどの子どもが学習の遅れから、意欲が低下し不登校となる。そのため子どもの状態に応じて学習プランを設定し支援を行う。個別学習や集団学習等、子どもの自尊心が傷つかないよう配慮し学習意欲を向上させる。



### 社会体験

会社見学会や社会人講話を通して職業理解を深めます。子どもが将来の進路選択が増やせるようになるためのプログラムです。職業体験や就労経験を積むことで、働く意欲の向上と将来の選択肢を増やして行くことを目的にプログラムを実施している。



### PC講座

貧困家庭の特徴としてPC普及率が低いことがあげられる。将来、就職する際、PCスキルの向上は不可欠であるため、PCの基礎的な講習を実施している。Microsoftと提携したプログラムを活用しPCスキルの向上を図る。



希望を感じられる世の中に  
ちゅらゆい



### 親カフェ・・・月1回開催

kukuruを利用している親や、子どもが居場所につながっていない不登校の子どもを持つ親の集まり。カフェのように気軽に集い悩み事について話せる場所。

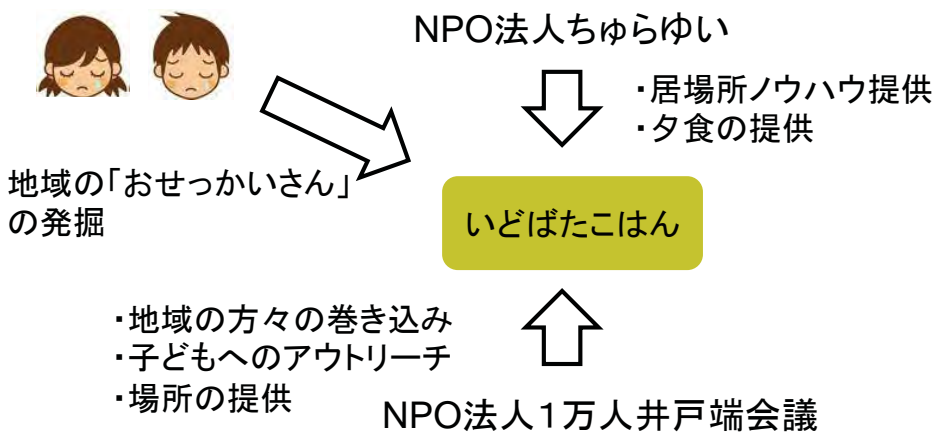
- ・12月より3回開催。延べ16名の親が参加。
- 「親の声」
- ・家の経済状況が悪く、仕事に時間を取られるため、養育がおろそかになってしまった。子どもの不登校状態を解消できず困っている。
  - ・教育委員会や学校に相談するが、教室に戻す支援が中心のため、子どもが支援を拒否する。
  - ・教室に入れないと教育が受けられず、親が頑張っても子どもの学力の遅れが取り戻せない。専門機関の支援が欲しい。



夜



対象者：概ね13歳～18歳で地域において課題を抱えた子どもを対象に居場所型で夜のサービスを行う。地域で運営できるサイズで月1回子どもたちに居場所を提供する



どこにも居場所がない。子どもがいる。

### 事業効果

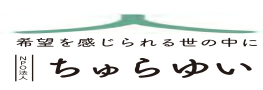
- ①地域で課題を抱えた子どもの発見と対応
- ②子どもの状態を把握する
- ③子ども・親に対して必要な支援を実施する



## 3つの貧困・・・Kukuluの実践から見えて来たこと

- ①経済的貧困
  - ・生活困窮世帯では、生活保護の制度を活用することにより経済的貧困から最低限の生活が保障される。
- ②社会的貧困
  - ・福祉や教育等、必要なサービスを受け入れる土壌がない。
  - ・福祉、教育の支援とつながりにくい傾向があり、社会孤立しやすい。
  - ・社会資源から切れることで、家族ごと孤立し負の連鎖から脱出できない。
- ③文化的貧困
  - ・その家庭に育まれて来た風土や文化。
  - ・子どもへの教育がしっかりと行われにくい家庭環境にある。ネグレクト等。
  - 深夜徘徊していても問題視しない教育環境。親も同じように育てられた。
  - 母子家庭ではダブルワークし子どもの世話をする余裕がない。

①は制度を活用することにより解消される。ただし③が阻害要因となり②の貧困を引き起こし、子どもの自立が大きく阻害される。そして負の連鎖が生まれている。



## 子どもたちの状況

- ①お金を払ってプログラムに参加できる層
- ②Kukuluの卒業生や今後卒業する生徒(31名対象)
- ③生活困窮している不登校生徒

①の特徴・・・受益者負担でサービスが受けられる家庭

- ・当事者は社会不適応に対して内面的葛藤を抱えている。
- ・当事者は孤立しており、社会参加できる場をもとめている。
- ・親の意識も高く経済的にもサービス利用が可能な層。

②③特徴・・・受益者負担でサービスが受けられない家庭

- ・当事者は多重で複合的な課題を抱えているため課題に対する認知が低い。
- ・孤立している認知がほとんどない。(家庭ごと孤立しているため)
- ・親の意識が低く経済的にも困窮しているためサービス利用の概念がないに等しい。

②、③の子どもを放置すると20代、30代になってから複雑化した状態で支援が必要な若者になっていく。そのため中学生時代につながって早期対応できれば支援コストは大きく減少する。

希望を感じられる世の中に  
ちゅらゆい

## 今後のkukuluに必要なと思われる支援

### ○シェアハウスによる生活訓練

- ・一人暮らしを希望する子どもの生活訓練を目的としたシェアハウス
- ・生保世帯の場合は、子どものアルバイト収入が生活費に吸収されるケースが多い
- ・将来の自立を目的とした生活訓練をシェアハウス型で実践したい。
- ・また、一人暮らしに自信が持てない子どものために、1人暮らし体験ができるための部屋を確保する。

\* ひきこもり支援では、民間団体が合宿型の支援を実施し成果を出している。ただし、合宿型のため職員体制や安全管理の面に注意が必要。

### ○就労を応援する場

- ・企業と連携した就労訓練や職場実習を経験することにより、職業意識の向上を図る。
- ・仕事作りを子どもが経験する場を作る。カフェや飲食店の運営、企業と連携した商品開発等。
- ・キャリア形成の意識を中学から持てるよう、キャリア教育の実践を行う。

\* 就労を応援するための会社を設立予定。

希望を感じられる世の中に  
ちゅらゆい



NPO法人沖縄青少年自立援助センターちゅらゆい

法人本部 〒904-2213 沖縄県うるま市田場1641-1

那覇支部 〒900-0021 沖縄県那覇市泉崎2丁目8-18医療法人上泉会内

TEL/FAX 098-923-0697

メール [commutto@joy.ocn.ne.jp](mailto:commutto@joy.ocn.ne.jp)

HP <http://www.churayui.org>



## 4. 鈴木 友一郎 様 提出資料

## 沖縄子どもの貧困対策(内閣府予算) ～子どもの貧困解消に向けて～

- ①支援員(こども地域ソーシャルワーク)
- ②子どもの居場所づくり事業

～6カ年事業、3カ年モデル事業～  
歴史的経緯や地域性に配慮し、子どもの育ちの支援を

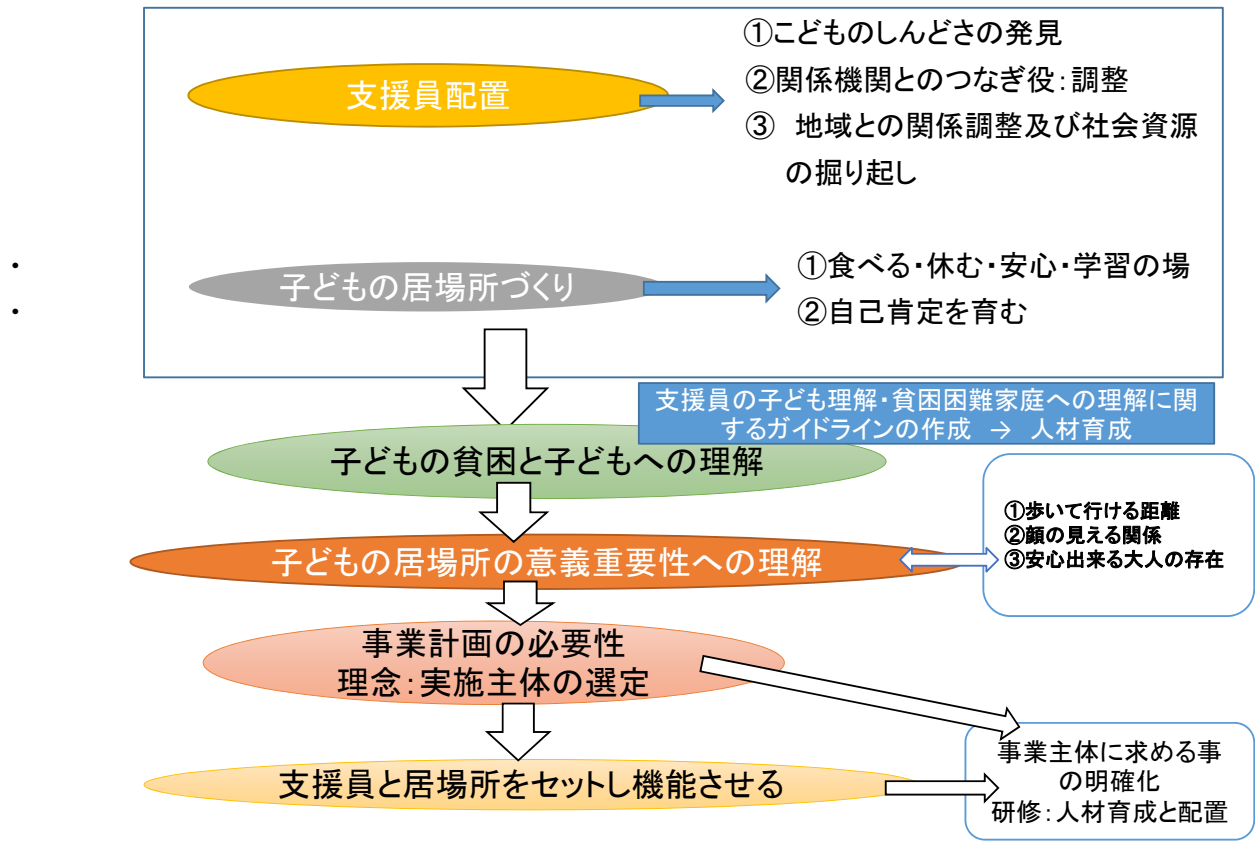
平成28年2月20日(土)

ももやま子ども食堂  
鈴木 友一郎

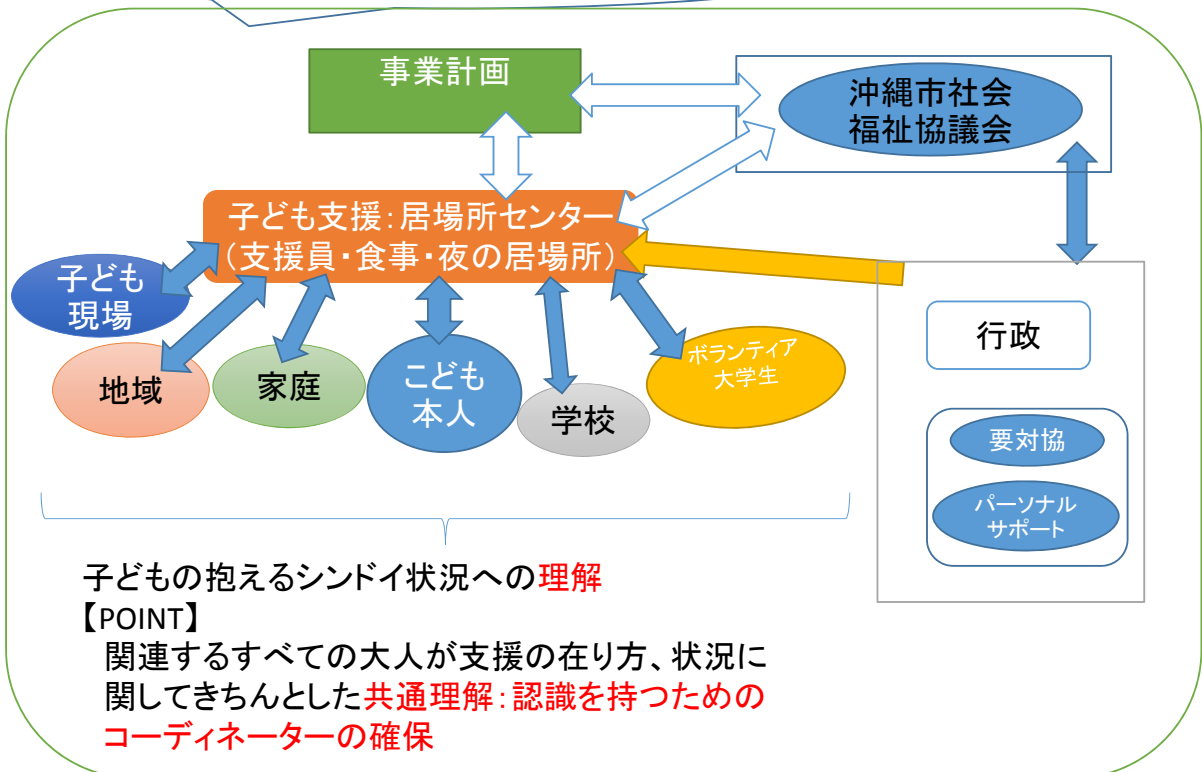
### 今日の状況

- ①沖縄の歴史的経緯からなる、子どもの育ちの現状を捉える
- ②親の就労:経済状況の把握
- ③子どもの生活実態の把握
- ④子どもが育つ社会基盤の立ち遅れ
- ⑤地域社会の変容と実態

# 子どもの貧困の対策について



## 事業計画策定及び実施のイメージ



## 子どもの居場所:子ども支援(寄り添い)事業化に向けて

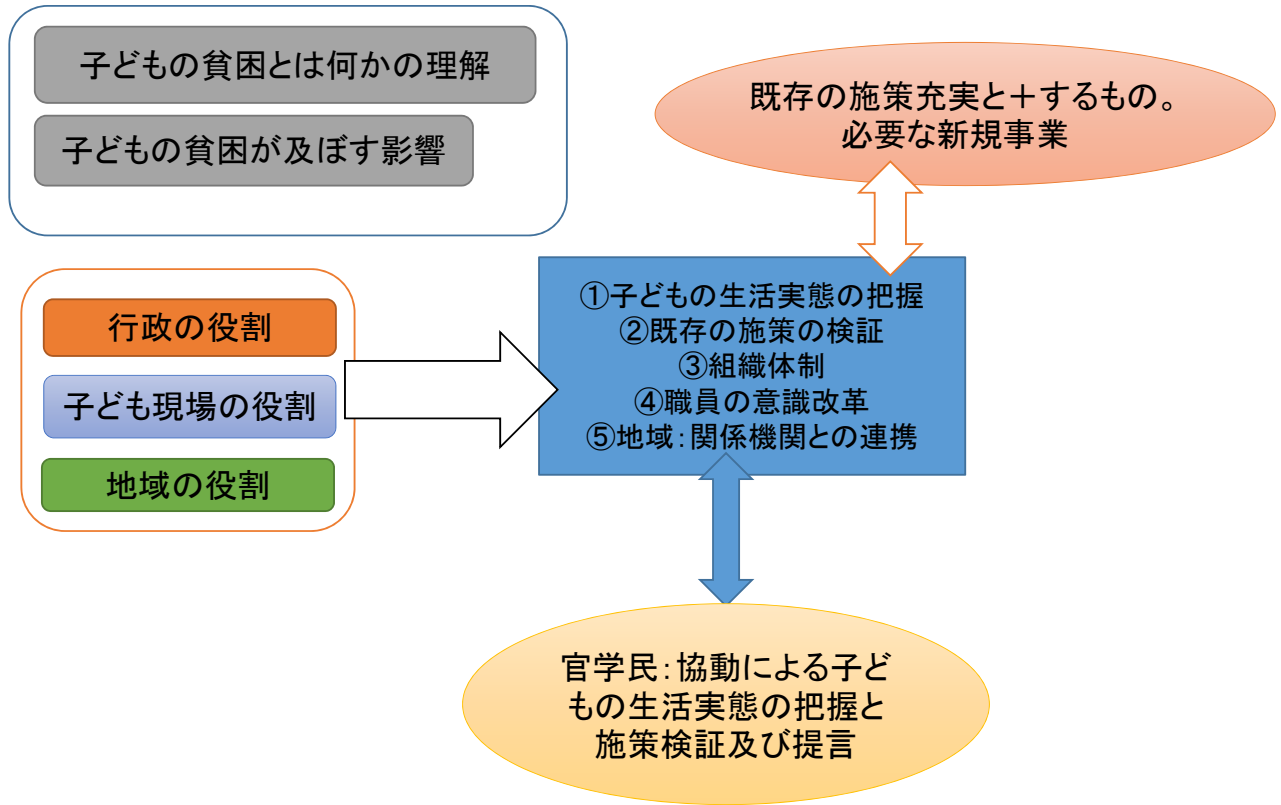
～具体的で、実現可能な事業提案に向けて～

- ・理念
- ・事業内容(いつ、どこで、誰が、何を)
- ・組織体制(運営:実施体制)
- ・予算の枠組み
- ・連携の仕組み(連携図作成)
- ・運営マニュアル
- ・実践サポートBOOK作成(指針)
- ・様式等の作成
- ・事業における期待される効果

## 沖縄子どもの貧困対策の課題として

- ・支援員の確保と育成(支援員の役割:機能の明確化)
- ・居場所づくりの基準(機能と役割)  
→ガイドラインの作成
- ・子どもの成長と発達への理解
- ・既存の子ども施策の課題整理と活用  
(既存施策と支援員:居場所の位置付け)
- ・事業の継続性

# 沖縄市における子どもの貧困対策として必要な視点





## 内閣府意見

1、昨年秋以降、沖縄県内で、子供の貧困対策に関する様々な動きがありました  
が、皆様の活動の中で、何か変化はありましたでしょうか。

(例えば、地域や他の団体などとの関わり、自治体との連携、活動への援助の変  
化など)

①子ども食堂を立ち上げるに当たり、開所から 1 か月間電話での問い合わせが  
続いた。1 か月で 100 件近く。(内容:ボランティア希望、食材の提供、寄付金、  
自分の地域でも展開したいとの相談、見学など)

②特に、民間からの支援の広がりはいいい意味で驚き

③沖縄市内において、秋以降 同様な子どもの居場所づくりの団体が 3 つほど  
立ち上がった。各団体と意見:情報交換を行っている。

④2 月上旬に、沖縄市社会福祉協議会の呼びかけで、子ども支援団体 10 団体で  
意見交流会を開いた。今後も継続する方向

⑤沖縄市役所、子どもの貧困対策連携会議が発足された

2、皆様の活動について、一層地域や他の団体などとの連携を進め、地域全体で  
子供や保護者への支援をしていくためには、どのようなことが必要でしょうか。  
また、行政へ期待することは何でしょうか

①子どもが育つ社会基盤の整備が歴史的な経緯もあり遅れている。この基盤整  
備を進めて行く。保育園の整備、学童保育の整備(高い利用料のため、利用が出  
来ない子どもの存在) 既存の子ども施策を他府県並みに整備していく。

②地域の中での子どもの居場所を、出来れば小学校区の中で点在化させていく。  
既存の社会資源の活用(公民館、社会福祉法人、高齢者施設等) 場創り、人を繋  
げるコーディネーターの配置:人材育成。

③既存の、保育園:幼稚園:学校:子ども現場:行政:地域等との情報・課題共  
有・連携の場が必要と思われる(子どもの育ちを継続して取られる視点の共有)

④市町村を跨いだ、情報の交換やネットワークの場

⑤行政-民間と連携する仕組みや、日常的な情報意見交換の場があれば、

⑦活動の継続には資金が必要 官民を挙げた基金の創設(県内外への呼びかけ)

## 5. 梁 裕之 様 提出資料

# 貧困の連鎖を断ち切るために、ていーだこども食堂が取り組むこと

～地域の子どもは地域で育てる... P T C A連携へ～



ていーだこども食堂運営委員会

この度は、当機会を与えて頂き、地域の子供たちや運営委員を代表し心より感謝申し上げます。今般、こどもの貧困問題が叫ばれる中、児童虐待やいじめ、不登校など、児童を取り巻く環境が時代の流れとともにより深刻な状況下において、平成27年5月に浦添小学校PTA、児童センター、CSWを中心とした有志で「ていーだこども食堂」を開設しました。

現在、毎週土曜日の13時より、小学校に隣接する浦添ぐすく児童センターで孤食防止の活動として子供達と一緒に料理を作り、一緒に食べる活動を行っています。現在の活動は昨年6月に行われた「浦添市のまちづくりプラン」での助成金と賛同頂いた友人地域からの寄付を原資に活動を行っています。現在は、活動を通じて見えてきた次の課題へのケアプランを行っていくための環境整備を各関係機関にお願いしています。

わたしたちは「地域が主体のゆいまーる」が、沖縄ならではの活動の基本として考えます。みんなで少しずつ優しい気持ちを紡いで、すむ街を優しく包んでいきたい。そのために、来年度に向けて進めている状況を、みなさまに共有させていただきます。

## 1. ていーだこども食堂のなりたち

PTA活動や児童センターへの送迎をしていく中で、給食以外にご飯を食べられない子どもたちの存在を知りました。後に知ることになるのですが、学校、行政、民生委員の方達は、この子の存在を知り、各々が出来る範囲で向き合うも、生きていくための「ご飯を食べること」の抜本的な手当ては出来ていなかった。

そんな中、児童センター国仲館長（前任者も含む）は、彼らと向き合い、お腹を空かせた子どもたちに何か手伝いを与え、身銭を削ってご飯を提供していました。そんな彼女の活動も児童センター指導員（嘱託）の任期や、現状の児童センターの業務範疇における限界がありました。この状況を目の当たりにし、国仲館長・山城（社協CSW）・根間の3名で、夏休み前（夏休みには給食すらなくなる）までに地域へ協力依頼できるよう事業を進めることを目標とし、平成28年5月23日（土）に第1回目のこども食堂が始まりました。

## 2. 現状

5月に始まった「浦添・ていーだこども食堂」も本日2月20日で38回目となりました。活動を初めてまもなく報道に取り上げて頂いたことをきっかけとし、こどもの貧困問題を初めて知った地域の自治会（6自治会）や近隣地域の方の個人的な協力、さらには食品メーカー（3社）からの食材提供のご支援を頂いています。この流れは今後も広がっていくことが予測されます。来年以降の食材調達は現年と同じく自ら賛同者へ発信していくこと、行政や社協主導のフードバンク事業と連携しながら行います。

当活動を影で支えてくれる、見守りボランティアは現在20名を超え、主に校区内のPTAメンバーを中心に地域の方や民生委員の方、てだこ市民大学の学生が無理のない範囲でお手伝いしています。こども食堂に参加した子どもたちは、地域の大人たちと時間を共有することで、自己有用感が生まれ、また自ら調理する体験から自主性が育まれています。自己肯定感に配慮した丁寧な関わりの中で、自らの夢を語ったり、今後の活動企画などを自ら話し合うようになってきました。活動前後での子どもたちの成長に驚かされています。

その傍ら、子どもたちが家族のなりわいをおもんばかり、自分を押し殺していることにも気づかされました。信頼できる大人には、親や教師には絶対言わないことも自分から話してくれるこどもも出てきました。最もケアしていきたいこどもだけでなく、その手前の課題を抱えたこどもにも気づき、現在寄り添えています。

課題を抱えた子も（こどもは課題を抱えている自覚がありません）、そうでない子も、誰もが参加でき、「生きる力を育める地域に必要な居場所」として、「どの校区内でも地域と連携して出来る活動」として確かな手応えを感じています。

### 3. これから向き合っていきたい課題

児童センターを活用することで、子どもたちに必要な遊びと食を保証する環境が整いつつあります。

対象の子どもたち（特に課題を抱える子どもたち）に対し下記のケアの必要性を感じています。

#### (1) 生活習慣の改善

親から、お風呂・洗濯・整理整頓等の基本的な生活習慣を教えてもらうことができていません。

お泊り会等で、基本的な生活習慣を学べるようにし、社会性を身につけさせたい。

#### (2) 学習到達度に応じた学び場の提供

「俺はバカだから、どうせ無理」といって勉強を放棄する子どもたちの存在があります。

中学生で九九が出来ない子、高学年なのに自分の名前が漢字で書けない。出来ないことが恥ずかしいから人前で勉強することを嫌がります。タブレット端末を使った個別学習で、その子の学習進度に合った、勉強する機会を創りたい。浦添市のオンライン学習システムも活用し、周囲の目を気にせず、各々の学力到達度にあった年次に遡って学んでいく。理解する楽しさを共感し将来の夢や希望を諦めていた子どもたちを応援したい。

#### (3) こども食堂農園の整備

肥料作りから始め、自分たちで畑を耕し、苗を植え、収穫し、食す。

食べ物のライフサイクルを肌で感じるにより食の大切さや食べることの喜びを学んでほしい。

#### (4) 地域貢献活動への参加機会の提案

子どもたちの中から地域への感謝を形にしたいとの話があがってきました。お世話になった方へ恩返しをしたい。ボランティア精神の芽吹きがある。おでかけこども食堂を校区6自治会で行うことで、地域との絆を深める場を提供したい。

運営委員の中の最大の不安要素は、立上以前からの本地域の現状を熟知している国仲館長が5年任期満了で児童センターを離れざるをえない日が来ることです。現在の雇用関係について非常に危惧しています。本こども食堂の活動の最大の立役者は国仲館長であり、日頃から無償の愛で子供達へ向き合っている姿が私たち地域の大人を感動させ、地域内にここまで浸透したものであることを断言いたします。雇用に関しては国の法律などクリアすべき課題も多々あることを理解しておりますが、地域に必要な方が今後も地域に残れることを最大限に要請していきたい。

### 4. 持続可能な組織のカタチへ

NPO化でない地域活動の先駆けとして、PTAの枠組みをさらに活用していきます。

現在の主要メンバーが数年後になっても、地域の中で活動が持続可能な仕組みとします。

#### ●PTAの枠組みを活用して、活動の輪を広く且つ持続可能な仕組みへ進化させます

1. PTA専門部（健全育成部）の活動に、こども食堂への協力を明文化する。
2. こども食堂の会計をPTAの総務部が、別会計・別口座で管理する。
3. PTA年間行事と、こども食堂の活動に、相互補完の視点をいれる。

上記により期待されること

現在の無関心層が参画してもらうことで、関心層になってもらえる。

親としての気づきと、子どもたちへの寄り添い精神（自他問わず）を育む  
運営作業の分担で、参画の負担をへらし、持続可能性を高める

#### 『貧困食堂と書いて「こどもしょくどう」と読まれる』ような空気感があってはいけない

子どもたちは敏感です。「こども食堂は貧乏な子が行く所でしょ」

「困っていく子の食品がうちの子が行くことで減るのでは？」などの声も聞こえます。

偏見や誤解を地域で生まないためにも、「こどもの居場所」としての理解を育むための設計としてPTAの仕組みを活用します。

地域創生を地域のココロづくりから取り組みます。